

ラシーヌの“Conversion”の性格について

尾崎 正 明

はしがき

ラシーヌは三七才の若さで劇作家の生活に終止符をうつた。若し彼が、そのまま、死に至る約二三年間を劇作に没頭していたら、フランス文学に更に優秀な作品を付け加えていたかも知れない。ラシーヌを愛する者にとつては、彼の劇作からの引退は誠に惜しまれてならない事件である。従来、この引退と彼の Conversion とは密接な関係があると考えられてきた訳であるが、本論文では、このラシーヌの Conversion の問題を中心として、彼の宗教に対する態度について、検討してみようと思う。

Conversion とは Larrouse du XX^e Siècle に「(1) Action de se tourner vers, et particulièrement vers une autre religion」(2) Passage d'une vie peu chrétienne à la pratique des devoirs religieux とある。

(1) はある宗教から他の宗教へと移る事、所謂改宗であり、(2) は信仰の深まりを意味する回心である。ラシーヌはジャンセニスム以外の宗教は知つていなかったのであるから、彼の Conversion といえは、(2) の回心を意味する事になる。それ故本論文では、ラシーヌがどのようにキリスト教(厳密にはジャンセニスム)の信仰を深めて

いつたかを考察の対象とする事になる。

一六七七年という年は、ラシーヌにとつて実に目まぐるしい年であつた。即ち同年一月一日には、約二年間の沈黙を破つて、ラシーヌ最後の tragédie profane たる『フェードル』が l'Hôtel de Bourgogne で初演され、七月一日には、カトリクス・ド・ロマネとの結婚式が執行われ、九月十一日には、ボワローと共にルイ大王から正式に王の史官 (historiographe) に任命された。ラシーヌはあれ程の情熱を燃やしていた演劇の世界から引退したのである。全く神秘的なウェールに覆われた事件といつて過言ではない。このような外面的生活の急変は、ラシーヌの内的な面に大きな動揺変化が生じた為であると考えるのも無理からぬ事であろう。では果して一六七七年に、ラシーヌの心に突然革命が行われたのであろうか。

G・ラルメは、ラシーヌの劇作引退の最大の原因を彼の回心に求めている。ラシーヌが『フェードル』を書いた時は三八才であつた。三八才といえは漸く老年へ向かおうとする年であり、死とか宗教等の問題が次第に入の心を占めてくる時期である。この様な年令に達したラシーヌに、彼の幼年時代、ポール・ロワイヤルに於いて植えつけられた宗教的精神が芽をふき出し、彼が世俗的榮譽を求

めて専念した劇作から、彼を離れさせる事になったと説明している。又 P・ロベールも、ラシース引退の最も重要な原因は、彼の宗教への復帰即ち彼の回心であつて、敬神の念のあつた女性との結婚や、ルイ十四世の史官への任官等の如き外的事情、又数多くの敵の非難轟倒により、劇作家の生活に嫌気がさしたという様な原因は、すべて第二次的なもので、第一次の原因たる彼の回心のみによつてラシースの引退は充分に説明されるとしている。

ラシースの次男として生まれたルイ・ラシースは、その Mémoires の中で、父親の劇作引退について次の如く言つてゐる。

「私の父親が、子供時代に心の中に満たされた偉大な宗教的感情は、長い間心の奥に潜んだままでいたが、突然その眼を覚ますことになつた。彼は劇作家が *empoisonneur public* である事を認め、而も自分が、恐らくその中で、最も危険な人物であらうという事を認めた。彼は、悲劇はもう書くまいと決心したばかりでなく、詩さへ作るまいと心に誓つた。更に厳正な悔峻によつて、過去のまちがつた行いの償いしようとして決心し、修道院に這入ろうとする考えさへ持つた程である。」

以上見てきた如く、これまでのラシース引退の原因に関する殆んど伝統的とも言つてよい解釈は、ラシースの回心という事にその最大の論拠を置いている。▲フェードルを転機として、ラシースは俗人的ラシースから信心深い敬虔なキリスト教徒たるラシースへと急転換をした事を強調している。そしてイポリットに不倫の恋情を抱くフェードルのキリスト教的性格と、▲フェードルの *préface* がその確実な証拠だと主張する。

事実、フェードルの *passion* は▲フェードル以前の作品の人物の

passion とは異質のものである。ロクサリスにしてもエルミオーヌにしても、一度び恋の *passion* にとらわれた時は、ひたむきに愛する者を自己の手中に入れるうとして猪突猛進する。そこには何ら自己反省的な態度はない。完全に動物的本能にかりたてられて、自己の愛欲的満足を充たそうとする。之に反してフェードルは、恋の痛手に悩みながら、自分の *passion* が悪である事をはつきり認識している。彼女に於いては良心の働きは刃の如く鋭い。彼女の意志は弱いながらも、不義の思いを何とかして制御しようとする。良心の命令に従おうとする。フェードルはボワローの言うごとく、正しく *«malgre soi, pitié, incertitude»* なのである。心の中は善を為そうとする意志に満たされていながら、邪欲という宿命にとらわれてしまつたフェードルは、あまりに弱い人間であり、遂に身の破滅を招く事になる。この様なジャンセニスム的色彩が、特に▲フェードルに於いて強調されているのであるが、この事実だけでラシースの回心を充分説明出来ると考える事は出来ない。この様な宿命論はラシースにユニークなものではないからである。ギリシャ悲劇の中でも、これと同じ *prédestination* の思想は見出せるのであり、ラシースはこのギリシャ的思想からも影響を受けたと考えることが出来るからである。

さて次に、▲フェードルの *préface* より、ラシース自身の声を聞いて、彼が自分の回心について何らかの意志表示をしているかどうかを検討してみよう。

「確かに言える事は、私が此の作品以上に *vertu* の強調されたものはまだ書いていないという事である。この作品では一寸した罪でも厳しく罰せられ、犯罪を犯そうという單なる考えだけでも、犯罪

そのものと同じ恐ろしきで眺められている。faiblesses de l'amour は、真の faiblesses と考えられ、passion はそれによつて生ずる心の乱れすべてを示す為にしか描かれていない。そして vice はどこでも、その vertu の醜さを知らせ、且つそれを憎ませる色彩にぬらわれている。それが正しく、公共の為に働いている人の目指すべき目標である。そしてこれが、初期の悲劇詩人が何にもまして、心掛けていたものである。彼等の劇場は、哲学者の学校に劣らず vertu の教えらるる学校であつた。だからアリストテレスは、劇詩の法則を作つたのであるし、又哲学者の中で最も賢明なソクラテスは、ユーリピデスの悲劇に手をつける事を軽蔑しなかつたのである。我々の作品も、これらの詩人のそれと同じ様に、堅実で有益な教えに充たされる事が望ましい。恐らくそこそが、悲劇と、敬虔及び宗教上の学識で名高い多くの人々とを和解させる一方法であらう。

彼等は、近年悲劇を非難攻撃したが、若し劇作家が観衆を楽しませると同じく教えるという事を考え、その事の中に、悲劇の真の目的を追求して行けば、必ず悲劇をばもつと好意的に判断するようになるであらう。」

ラシーヌは vertu を称揚し vice を憎む事を、劇作家の真の目的とした。劇作家は人を楽しませると同時に、人を教化するという教育的目的を持たねばならないのである。ラシーヌは「フェードル」 という作品によつてそれを実証したのである。「フェードル」は人に plaire する事以外に、vertu の教科書の役割を果たすのである。そのように劇作家という *métier* を通して、ラシーヌは人類の偉大なる教師たる事を自任し、劇は人間を墮落させるものではなく、却つて人間に偉大なる教訓を与え得ると主張しているのである。そして

このような倫理的・教育的目的を持つ劇は、宗教と両立しない筈はなく、共通の目的を持つてゐる事を強調しているのである。要するに、この *préface* でラシーヌは、劇作家である事を悔いてもいけないれば、過去の生活が真違つていたという反省もしていない。唯暗に、ポール・ロワイヤルと和解したいという意向は認められるが、それは彼が回心をするからという条件によつてではなく、演劇が宗教と矛盾するものではないという論拠によつてである。この *préface* は自己弁護論であり、演劇肯定論である。一筋に信仰の道に這入ろうとする意志は微塵もくみとる事は出来ない。

ルイ・ラシーヌは、「フェードル」によつてアルノーとラシーヌとが和解する運びになつた状況を *Mémoires* の中に記述している。ボワローが、ラシーヌは劇作家として決して誤つた道を歩んでいるのではない事を示す為に「フェードル」をアルノーの前で読んだ時、アルノーは「*la tragédie est innocente*」と叫んだという事である。「フェードル」がジャンセニスムの偉大な教訓を教えている事を、アルノー自身が認めたのである。彼が今まで持つていた演劇は悪であるという説を撤回し、演劇の存在価値を肯定した訳である。だからこの二人の和解の原因を、ラシーヌの回心に求めるのは誤りであつて、ラシーヌの演劇論が認められたという事に求められねばならない。

では何故ラシーヌは、このような倫理的・宗教的問題を扱つた *préface* を書いたのであらうか。キリスト教の勢力の強かつた十七世紀に於いては、文学の面に於いても、倫理・道德の問題は一般世人の強い関心の的であつた。聖職者やキリスト教徒の演劇に対する道德的批判は相当厳しく、作家は常にそのような批判に答える必要があ

つた。《フェードル》の préface もその様な時代的要求の産物である。ラシーヌはこの préface によつて、演劇の眞の意図と宗教とは面立する事を示したのであつて、彼が宗教信仰へ這入る事を宣言しているのではない。事実、ラシーヌは《フェードル》制作以後と雖も、常に劇や詩に対する誘惑に負けている。ルイ・ラシーヌさへ、父ラシーヌは《フェードル》以後も《Iphigénie en Tauride》や、《Alceste》や、《Oedipe》等の悲劇を書くとしていたと、彼の Mémoires の中で述べてゐる。更に、R・ピカールによれば、一六七七年の所謂ラシーヌの回心後五年を経て、ラシーヌはマントノン夫人の依頼に応じて、《Chute de Phaëton》を書く事を承諾した。又宗教的色彩の殆んどないプラトンの《Banquet》の翻訳をやり、更に一六八七年には、彼の悲劇の全集を発行している。要するに、一六七七年以後といえども、ラシーヌは生まれつき持っていた文学創作の欲望を完全に仰える事は出来なかつたのである。一六七七年は何もラシーヌの精神的一大転換期ではない。劇作引退によつて、ラシーヌは隠遁者の如く、俗界から離れて懺悔の生活を送るようになったのではない。

二

前節に於いて、ラシーヌは《フェードル》を転機として、劇作家の生活から引退する意志を持っていなかつた事を述べたのであるが、《フェードル》初演と同年に、結婚生活にはいり、ルイ十四世の史官になつた原因はどこにあるのであろうか。ルイ・ラシーヌは父親の結婚に關して次の如く書いてゐる。「彼が結婚をする決心をした時は、妻の撰択には恋愛も利害關係も全然与つていなかった。彼はそのような重大な事柄に關しては理性にのみ相談した。」(Mé-

moires sur la Vie et les Ouvrages de Jean Racine) この理性といふのは、ルイの考えでは、父が過去の迷つた生活から、眞の救いを求めうる虔敬な生活の導き手としての理性を意味している。ルイは父の回心後の救いへの努力のみを強調し、一切の利害打算や恋情を捨て去つた純粹に宗教的見地から、父の結婚を解釈している。さて此の頃のラシーヌには、ルイが言つている程の宗教心は無かつた事を前節で述べたが、この理性による結婚にも、宗教的目的以外の他の理由が考えられねばならない。名譽と快樂とを求めて立身出世をしてきたラシーヌである。一六七七年に彼は完全に世俗的欲望を打ちきつたと考えられるであらうか。彼の結婚と世俗的欲望とを関連づける事は出きないであらうか。

十七世紀フランス社会に於いては、家柄とか身分の持つ意義は頗る大であつた。如何なる財産家と雖も、貴族にならなければ社会的に認められるという事は少なかつた。ラシーヌの結婚も此の様な社会的背景に立つて理解する必要がある。R・ピカールによつて、honorable な結婚は當時のラシーヌにとつて最も時宜に適したものであつた。何故なら、ラシーヌはまだ確實ではないにしても、ルイ十四世から史官という名譽ある職を授けられるという事がわかつていたので、少くとも外觀は宮廷に於いて恥づかしいものが必要であつたのである。身元のはつきりした家柄の立派な女性との結婚によつてラシーヌは、自分の女優とのいかゞわしい過去の關係も人は大目に見てくれるであらうし、又演劇の世界で得た名声も損わずにすむであらうと考えたのであらう。要するに、演劇の世界で得た財力でもつて、宮廷にはいりうる高い社会的身分を買いとつたのである。かかる理由で、彼は昔からのしつかりしたブルジョワで後に貴族に列

せられた者の娘と結婚したのである。⁶ 彼女は実に敬神の念の深い婦人で、ラシーヌとは全く反対の性格の持主であつた。ルイによれば、彼女は、ラシーヌのような偉大な劇詩人と結婚しながら、「女性韻と男性韻との区別も知らず、夫の書いた悲劇作品を読んだ事も見た事もない。」(Mémoires sur la Vie et les Ouvrages de Jean Racine) 然しラシーヌにとっては、性格の相違は問題ではなかつた。社会的地位、宮廷に這入りうる体裁のみが彼の心を占めていた。つまり、この結婚は史官としてルイ大王に出仕する下準備と考えられる。

次いで史官任官についてもルイの言葉を引用してみよう。

「私の父は常に自分の救いの事に気を配っていたが、陛下の恩召(史官任官の事)を神の恩寵と考え、又この恩寵が、彼を、全く詩から離れさそうとして、この重要な職を授けてくれたのだと思つた。」(Mémoires sur la Vie et les Ouvrages de Jean Racine) ルイ・ラシーヌは父親をあまりに信仰深い立場からのみ眺めている。彼の生まれは一六九二年であるから、父が五二才の時で全く晩年の時代である。ルイの眼に直接映じた父の姿は、晩年の敬虔な信仰に立歸つた聖なる優しい父の姿のみである。ルイにとつては、父の一生にわたる姿を客観的に把握する事は不可能であつたろう。Mémoires に現われた父ラシーヌの姿は、特に彼の宗教的な面が強調されすぎた感がある。この点 Mémoires を読む時は、注意する必要があると思う。

さて、史官任官についてのルイの解釈は否定せざるを得ない。ラシーヌは田舎の中流ブルジョワの出身である。而も幼にして両親を失つてゐる。経済的独立は早くから彼の関心の的であつた。彼

がユゼースの叔父のところへ行つたのも、結局聖職を得ようという経済的目的の爲であつた。そしてこの野心は、彼の劇作品の相次ぐ成功によつて成就された。だから史官任官については、物質的野望以外の他の理由が考えられねばならない。生活の安定という事はラシーヌの初期に於いては大きな関心事であつたが、一六七七年頃には、彼の経済的安定は確立されていた。別に史官にならなくても彼は充分生活を楽しめるだけの収入の地盤は築いていた。

では如何なる目的で、彼が情熱を傾けていた演劇の世界から引退したのであるうか。ラシーヌの野心には、物質欲と共に名譽欲もかなりあつた。物質欲が充たされると、名譽欲が頭をもたげてくるのが自然の勢いであろう。特に十七世紀フランスのように、身分制度の嚴重な社会に於いては、身分というものの持つ意義は非常に大である。田舎のプチ・ブルジョワであつたラシーヌに、宮廷に於いて太陽王の治世の歴史を書くという名譽ある職が提供されたのである。ラシーヌにとつては抵抗し難い好餌であつたに違いない。王の史官になるという事は社会的地位の大なる進歩であり、而もそれは、劇作家としては到底到達し得ない地位である。ラシーヌの史官には彼の名譽が大きく働いた事は否めない。ラシーヌは複雑な性格の間であつた。互に相矛盾する性質をすべて一つの体に包容していた。彼は崇高な詩人でもあれば、全くの俗人にもなり切れる人物であつた。優しきラシーヌでもあれば、辛辣な毒舌を弄するラシーヌでもある。そしてこの様な異質の性質が、彼の心の中で互に斗いを続け、或る時は良い点が、或る時は悪い点が強く前面に押出されてくる。史官任官の際には、詩人としてのラシーヌが後退し、世欲的欲望にかられたラシーヌが力を得たものと考えられる。然し史官は決して

ラシーヌの *gêne* に適するものではなかった。彼の *gêne* はあくまで詩の方面にのみ存するのである。ボワローは自分の死に際して、次の様にルイ王に伝えて欲しいと言つたという事である。「ラシーヌ氏と私とが、詩の方面にのみしか役立たない自分達の天分に、あまりにも反した仕事を受持たされたのは、誠に残念でした。」

三

R・ドカールはラシーヌの宗教の性格について次の如く言う。

「彼のジャンセニスムの起源は特に家庭的なものである。それは彼が幼にして受け継いだ遺産であり、神学的というよりはむしろ社会的ニュアンスを含んでいる。」即ち彼の信仰は、父祖伝来の家庭の宗教を何らの批判もなくそのまま受け継いだものであつて、因襲的・習慣的に宗教の戒律を守る事に安んじているいわば惰性的信仰である。この様に幼にして洗礼を授けられた者は、成長するに従つて屢々宗教から離れるという例が少なくないが、ラシーヌもその例にもれなかつた。ラシーヌの宗教に対する不確かな瞬時的態度は、彼が神学的・哲学的な確乎たる基盤を持つていなかったという事の中に、その大きな原因が存在する。彼のこの様な性格の信仰は、一生を通じてどのように変化し発展していつたか、その概観を試みてみよう。

ラシーヌは信仰深い両親の間に生まれ、孤児となつてからも、宗教心の厚い叔母に引取られて養育され、ポール・ロワイヤルに於いて三年間厳格な宗教教育を受けた。ラシーヌは生まれてから約二十年間、全くジャンセニスムの環境の中でのみ生活してきたのである。この宗教的教育や環境によつて、ラシーヌの心に深い信仰心が植えつけられたと考えるのは誤りである。二十才に足りない少年に

宗教の奥義を理解しようとする意欲は、一般的には見出されるものではない。更に、ラシーヌは本質的に詩人としての才能を持ち、宗教には大して興味が向かなかつた。事実彼自身も「昔ポール・ロワイヤルで受けた秀れた教育も、そこで見た敬神と懺悔の偉大な模範も私は殆んど善用する事がなく、單なる傍觀者であつたにすぎない。」(Mémoires sur la Vie et les Ouvrages de Jean Racine) と告白している。ラシーヌの心は殆んど常に、ギリシヤ・ローマの古典悲劇の方へ向かつていた。勿論そうだからといつて、彼が無関心ながらも、ポール・ロワイヤルに於いて受けたジャンセニスムの教えが、心の底に潜在する結果になつた事を否定する事は出来ない。宗教の勉強に専念しなければならぬポール・ロワイヤル時代のラシーヌに、文人としての欲求がむづ／＼と彼の体内に芽をもたげはじめた。初めのうちは *Ad Christum* やポール・ロワイヤルを称える詩等の様な宗教に関係のある詩を書いていたが、次第に世俗的な題の詩に熱中し、遂には教会が断乎として禁じている劇詩人になろうと決心する。悲劇を書く事が彼の何よりの望みとなる。南仏ユゼーヌに行つて聖職者となり、職禄によつて生活を安定させようとする企てが失敗に終ると、彼の心にあるものは、唯、演劇の世界に於いて名をあげようとする欲望のみとなつた。文学に深い敵意を有しているジャンセニスムは、彼にとつて全くうるさい存在となつた。ジャンセニスムにとつては、劇作家は、*«dominateur à toutes les positions qui ont tant soit peu de pitié»* であり、教会へはいる事も聖体拝領も禁じられている程である。だからラシーヌの叔母 *Mère Agnès de Sainte-Thécle* が、彼の救いの事を切実に願つて、涙を流しつつ諫言したのである。然しラシーヌは少しの反省の色も示さな

い。詩人としての才能を磨くべく益々努力を重ねるのみである。此の頃のラシーヌは毎日「*lettres sur lectures ou plutôt excommunications sur excommunications*」(Mémoires sur la Vie et les Ouvrages de Jean Racine)を受けると言つて、ポール・ロワイヤルに対し公然と反抗の旗をあげている。彼はいわばミューズのさきやきにしか耳を傾けなかつたのである。

かくてラシーヌは、*「ラ・テバッド」*から*「フェートル」*に至る約十四年間、彼のすべての情熱を劇作の爲に捧げるようになつたのであるが、ポール・ロワイヤルとの關係は、真の意味に於いては、完全に断絶してゐたとはいえない。それは外面的断絶であつて、内面的精神的断絶ではない。というのは、ラシーヌ自身の宗教に対する反感は、確乎たる論理的・神学的信念から生じたものではなく、彼の演劇に対する情熱を非難するジャンセニスムに、本能的・感情的に反感を抱いたにすぎないからである。ラシーヌのジャンセニスムの教義に対する理解は全く皮相的である。この様な感情的な宗教嫌悪というものは、又都合がよければ容易に宗教の味方になるという可能性を持つてゐる。この様な意味では、ラシーヌとポール・ロワイヤルとの絶対的分裂はあり得なかつた。唯ラシーヌが、*« assez malheureux pour n'avoir pas rompu un commerce qui [le] déshonore devant Dieu et devant les hommes »*である限り、ポール・ロワイヤルへ帰る事は許されなかつた。ラシーヌとポール・ロワイヤルとの分裂はジャンセニスムが文学を惡とする考え方に原因がある。

ラシーヌの劇作引退については既に詳述したが、十七世紀フランスに於ける文学者の文学に対する態度を理解する事によつて、更に

よくそれが理解出来る。ラシーヌが全情熱を捧げた文学でさへ、一つの *héritier* と考えられていた。*« 芸術の爲の芸術 »* という様な神聖な意味は十七世紀には見出されない。芸術も生活と結びついており、社会的身分の向上の一つの有効な手段として利用される場合も多かつた。文学的才能によつて王侯貴族に認められるのが、一番確実な出世の道であつた。だから当時の文学者は、*l'atavie* の術も自然心得るようになった。ラシーヌは時勢の流れに鋭敏な感覺を所有し、社会に対する適応能力も極めて大であつた。宗教に対する彼の態度もブラクティカルな立場から決せられた場合が多い。プリミ・ヴィズコンチの *« Mémoires sur la Cour de Louis XIV »* には、次の様な興味ある記事が載つてゐる。「二十年前フランスにやつて来た事のある人が、現在再びフランスに来てみて、驚きの眼を見張つてゐる。同一の国であるとは殆んど思えないからである。二十年前は、到處で舞踏会・祝宴・祭・音楽会ばかりが催されてゐた。然し現在では誰もが蜷居してゐる。遊び楽しんでゐる者は殆んどいない。更におつ／＼した用心深そうな態度さへ見られる。特にそれは宮廷に於いて甚だしい。……フランス王国はまるで神学校の様相を呈してゐる。」¹⁾ラシーヌは正しく、この世相の変遷の影響を受けてゐる。彼はこの様な宮廷の状況に、自己の行動をうまく適合させてゐた。この適応能力によつて、彼は次第に名を高めていつた。ルイ大王に認められる爲には、ルイ大王のやり方を真似るのが最有効の方法である事を彼は知つてゐた。ルイ十四世の信仰について、ユベール・メチヴィエは次の如く書いてゐる。「若い(ルイ)王は、自分の栄光と色事のことしか考えてゐなかつたが、のちに、ボシュエ、ラ・シャイエス師、マントノン夫人たちの影響で改心するようになる。

ルイ十四世は、聖書の内容についてはなにも知らず『宗教の外皮』(サン・シモン)だけしかもつていず、マントノン夫人やフェヌロンによれば『地獄を恐れる』だけのものではしかなかった。¹² ラシーヌの信仰もルイ十四世の信仰の性格によく似ている。所謂一六七七年のコンヴェルションにおいては、彼の心に急激の精神革命が起つてゐるのではない。唯外面的に、劇作の世界を去つて史官として宮廷人の生活をするという転換だけである。だから真の意味に於いては、一六七七年にラシーヌは回心したのではない。R・ピカールはいみじくも言つてゐる。「ラシーヌは一六七七年に *le monde* を離れるのではなくて、*un monde* を離れるのである。」¹³と。

一六八九年及び一六九一年に、夫々、《エステル》及び《アタリ》の二つの宗教劇が発表された。この様に聖書から取材した宗教悲劇を書いたのは、一つには、ラシーヌが聖書に親しみ、宗教に大きな関心を寄せていた事も認めねばならないであらう。然しこれも、ラシーヌの真に神を愛するという宗教心の発露であるかどうかは疑わしい。一六九〇年頃から、ラシーヌは頻りに *faux dévot* であるという非難を受けた。特に当時の *Chansonniers* はラシーヌの *hypocritisme religieux* を取扱つた歌を盛に作つた。その例を一つあげてみよう。

De faire sa fortune,
Les moyens sont divers ;
Racine en trouvait une
Dans le fruit de ses vers ;
Mais son ambition
N'étant pas satisfaite,

De la dévotion, don don
Le masque il emprunta, la

Pour n'être plus poète¹⁴

ラシーヌは、彼の劇作家としての生活の初めから、常に多数の敵を持ち続けたが、一六九〇年代の彼の敵は、ラシーヌの *fausse dévotion* という事を中心にして悪口を言つてゐる。いつの世に於いても人の成功を妬む者は多い。ラシーヌの二つの宗教劇は大成功を博し、又一六九一年には、彼は *gentilhomme ordinaire* に列せられた。これによつてラシーヌは、嫉妬され種々の悪口を受けたのであらうが、特に彼の偽善という事が問題とされてゐるのは、やはり彼の信仰が王に媚びることから発してゐたという事を証する様に思われる。

一六九八年三月四日付のマントノン夫人に宛てた手紙で、

《...la meilleure qualité que vous trouviez en moi était une soumission d'enfant pour tout ce que l'Eglise croit et ordonne, même dans les plus peües choses》であると、自分の信仰を自負してゐるが、ルイ王に対する不寵を逃れんとする彼の心は、同じ手紙の中で《Je puis vous protester devant Dieu que je ne connais ni ne fréquente aucun homme qui soit suspect de la moindre nouveauté.》と言つてゐる。《la moindre nouveauté》とはジャンセニスムの事であつて、彼がジャンセニストと何の關係もないと誓ふ事は、正に神を冒瀆するものではなからうか。ラシーヌは神から見放される事も恐れてゐたが、又同時に、ルイ王から見放される事も恐れてゐた。ラシーヌは神に対する信仰と、王に対する愛とをうまく調和させようとした。それは彼の持つてゐた相対立する性

實が可能ならしめたのである。

ラシーヌの信仰は、不純な動機があつたにせよ晩年になるにつれて次第に深められて行く。ルイ・ラシーヌの *Mémoires* や、彼の子供達への手紙によつて、ラシーヌが敬虔な信仰に到達した事が理解出来る。更に彼の遺言状には、彼がどれ程過去の生活を悔い、ひたすら神の恩寵によつて、自分の魂の救いがもたらされる事を祈願しているかが示されている。彼の長男ジャン・パチストに対する多くの手紙の中で、彼は詩や劇は人間の魂を迷わせる最も危険なものと、口を酸っぱくして忠告している。彼が若かつた時、ニコルは劇作家を *empoisonneur public* といつて非難したが、年若いラシーヌは丁度ニコルと同じ考えを持つに至つた。彼は「自分の詩的天分と、その才能がもたらした榮譽とに對して、輕蔑心しか抱つていなかった。」(*Mémoires sur la Vie et les Ouvrages de Jean Racine*) 晩年のラシーヌは *「フェードル」* の *préface* で書いた演劇を擁護する思想とは全く反對の思想を持つに至り、ジャン・セニストとして完全に回心したのである。然しこの回心も、フェードルと同じく、神を愛する積極的な精神からではなく、神を恐怖する心から発している。ルイ十四世と同じく、ラシーヌも亦、「宗教の外皮」しか持つていなかった。晩年の信仰は熱烈なものであつたにせよ、あくまで素朴な宗教で、地獄を恐れる程度を出ていなかった。

以上、一生を通じてのラシーヌの信仰の發展について述べたが、之を一言にして言へば、判然と同年何月何日に回心したと言う事は出来ないであつて、幼少時ラシーヌの心に植えつけられていた信仰の芽が、劇作時代の十四年間踏みにじられ、その後次第に生氣を取り戻して、成長し開花したものといえる。

註1 ラシーヌの受洗日は一六三九年十二月二十二日であるが、彼の生まれた日も恐らく十二月中であらうと顧われる。だから彼の *「フェードル」* の初演並びに、劇作引退の時の彼の年令は三七才が正しい。

- 2 G. Larroumet : *Racine*, 5^{ed}, Hachette, 1919, p.p.88-89
- 3 P. Robert : *la Poétique de Racine*, Hachette, 1890, p.p. 288-295
- 4 Louis Racine : *Mémoires sur la Vie et les Ouvrages de Jean Racine*
- 5 R. Picard : *La Carrière de Jean Racine*, Gallimard, 1956, p.308
- 6 Ibid. p.p.279-280
- 7 Jean Pommier : *Aspects de Racine*, Nizet, 1954, p.51
- 8 R. Picard : *La Carrière de Jean Racine*, Gallimard, 1956, p.464
- 9 *Lettre de la Mère Agnès de Sainte-Thérèse à Racine, son neveu (1665 ou 1666)*
- 10 Ibid.
- 11 R. Picard : *La Carrière de Jean Racine*, Gallimard, 1956, p.309
- 12 Hubert Méhivier : *Louis XIV, que Sais-Je?* IV-426
- 13 前川貞次郎訳 白水社 一九五五年
- 14 R. Picard : *La Carrière de Jean Racine*, Gallimard, 1956, p.309
- 14 Ibid. p.439